

Title	昭和三十一年度春季見學旅行記
Sub Title	
Author	吉田, 康麿(Yoshida, Yasumaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.2 (1956. 8) ,p.115(227)- 116(228)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560800-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

橋本増吉博士の訃

本塾大學名譽教授増本増吉先生には腦軟化症のためかねてより慶應病院に入院加療中のところ去る五月十九日午後四時十五分遂に逝去致されました。享年七十六歳であられました。

こゝに謹んで哀悼の意を表し併せて御冥福を祈り奉ります。

昭和三十一年度春季見學旅行記

五月十三日、本年度史學科春季見學旅行として伊木・淺子並に河北三先生の指導の下に、八時十三分淺草發の東武線にて足利方面に向う。一行四十三名。目的地は足利學校並に饒阿寺である。折悪しく天候は曇。

足利驛にて箕輪・鈴木兩先輩の出迎えを受け、その案内に従い先ず足利學校へと向う。

足利學校の設立は古く一説には小野篁によるともいわれているが、その眞偽は不明である。先に建築物より見學する。正面入口の「杏壇」の文字も嚴めしい孔子廟は寛文八年（一六六八）の建立で唯一の現存物である。淺子先生の御説明によると屋根は棧瓦

葺で、見た感じも堅牢なガツシリとした葺方である。

廟内に入り案内人の説明を聞きながら見學する。中央正面に安置されている孔子像は四百廿年前（天文年間）の作といわれ、孔子像としては珍しい座像である。又この像は孔子ではないとの説もあり、胎内銘はその何らかの解決となると思われるが、現在は既に判讀出来なくなつてしまつてゐる。その右に本校の設立者といわれる小野篁の像があるが徳川中期の作といわれ、あまり良い出来ではない。この像があまり重要視されていない所等から考へても、小野篁説は足利學校創設年代を古くする爲の單なる浮説にすぎないのかもしれない。

更に廟内右手の壁に足利學校の建物配置圖があり、これを見ると盛時の面影がしのばれる。祭祀も湯島の聖堂と同じく昔は春秋二回行われたとの事であるが、現在は秋一回しか行われず、祭具もあまり良いものではなかつた。足利學校は昔時はその政策上幕府の保護があり、御墨付を有し、ここに學ぶ學生も亦經濟的にも援助されていたのであるが、現在の姿はその名残りを全く止めていないと言えよう。

次で待望の圖書の見學に移る。種々ある國寶・重要文化財の貴重な藏書中より、伊木先生の御指定で國寶の「禮記正義」「文選」、重文の「周易傳」「周易注疏」「春秋左傳註疏」「古文孝經」それに「足利學校書籍目錄」を見る。いずれも貴重な圖書であり、各卷・各冊の卷首書眉や輿書に「足利學校」の朱印、「足利學校公用」等の墨書、又「上杉安房守 藤原憲實寄進花押」等の墨書が

記されてあつた。その中でも國寶の「文選」六十卷は、金澤文庫の舊藏本であり、北條氏の「虎印」のある北條氏政寄進の識語は國寶指定の理由となつてゐる。

晝食後次の目的地たる饒阿寺に向う。この頃よりあやしかつた空模様は愈々降り出さんばかりとなり、庫裡の階上で展示物を見學中遂に本降りとなつてしまふ。

饒阿寺では道路にそつて堀と土壘をめぐらした寺内に入り、諸建築物を見まわしながら伊木先生の縁起に關するお話を伺う。

開基の饒阿寺殿といわれているのは源義家の曾孫足利義兼で、饒阿寺は爾來約七百五十年間今日に至る迄、天災地變の厄に遭わず堂宇の舊觀を失つていないのは珍らしいと言えよう。眞言宗大日派の總本山で大日如來が本尊である。

庫裡内に入り各種寶物の觀覽に移る。先ず階下で國寶の青磁花瓶並に香爐各一對を見る。花瓶は足利義滿、香爐は同尊氏の寄進したものである。階上は大廣間一杯に古文書・什寶等が陳列されており、どれから見てもよいか一寸戸惑う程である。その中から特に目についたものを取上げれば、國寶の「平假名訓讀法華經八卷」それに「足利・新田古系圖」「足利尊氏御判物」(恩賞狀)等があり、又正和年間(千三百年代)の一山十二坊の繪圖も足利學校同様今日の狀態と照合して面白いと思つた。

假名書の法華經中の一巻に「元徳二年(一一三三〇)閏六月廿四日旬切」の奥書があつたが、これは假名書のものとしては珍らしいものださうである。尊氏の恩賞狀は南部掃部介に宛たものであ

るが、年號に南朝方のものを使用している點が珍らしい。この正平六年(一一三五一)閏二月廿六日という年記は北朝では崇光院の觀應二年に相當する。

四時頃拜觀を終え、降雨の爲一應解散し、寺内建築物の見學は自由とする。雨に降られながら見た本堂は、和様の入つた唐様建築で、天福二年(文曆元年・一一三四)建立と傳えているが、正應五年(一一九二)の建立と思はれる。應永十年(一四〇三)に修理の手が加えられてはいるものゝ、内部の蛇腹枝輪や組入天井隅丸柱等は鎌倉の建築そのままであり、往時の面影を残していた。小降りとはなつたが雨は依然として上らず、一日の有意義な見學を終えた一行は、雨の中を足利驛へと向つた。(吉田康麿記)

三田史學會例會報告

第四四〇回例會 昭和三十一年四月三〇日 於一二番教室

近山金次氏歸朝並に新入生歡迎會

オクスフォードの「古典教父學會」について 近山金次氏

第四四一回例會 昭和三十一年五月三〇日 於四〇番教室

ジュセツペ・マツチーニの政治思想 本郷廣太郎氏

大和朝廷の常陸地方經營に關する一問題

——常陸國風土記を中心として—— 井口悦男氏

第四四二回例會 昭和三十一年七月七日 於八番教室

近代世界氣溫上昇現象とその影響 西岡秀雄氏